

房総における斜格子暗文坏の分布

— 斜格子暗文坏の特殊性について —

大岩桂子

1. はじめに

旧上総国を中心として7世紀の末から9世紀初頭の遺跡からいわゆる「上総型坏」が出土する。「上総型坏」については、昭和58年に佐久間豊氏によりその分布状況と詳細な分析がなされた（佐久間1993）。一部の県外例を除き、旧上総国に出土が限定されたとした上総型坏は、その後の発掘調査に伴い県内での出土例が増加し、かつその分布が旧下総国にも及んでいることがすでに知られているものの、その分布状況は明確に把握されているとはいいがたい。

筆者は、四街道市物井に所在する嶋越遺跡の出土遺物を整理する中で、奈良時代の1軒の住居跡から出土した斜格子状暗文を有する坏と出会った。嶋越遺跡が所在する物井は、和名類聚抄の国郡部第十二「下総国第八十六」項に登場する下総国千葉郡物部郷に比定される地である。本稿はこれを契機に、律令制国家形成期に畿内の影響を受けて成立したと考えられる^{註1)}斜格子状暗文を有する坏の分布を明らかにし、その歴史的背景を解明することを目的とする。

「上総型坏」の定義については、次項で詳しく述べるが、本稿は上総型坏の中でも斜格子状の暗文が施された個体（以下、斜格子暗文坏と称する）^{註2)}に限定して集成を行った。

今回は報告書上での資料収集に留まったが、報告済みの遺跡から出土した資料についてはほぼ網羅することができた。そこで、現段階までに集成した資料にもとづいて、以下の分析を試みることにする。まず、斜格子暗文坏が出土した遺跡の分布を示し、その特徴と出土遺跡の性格を分析する。次に、斜格子暗文坏の出土量から遺跡間、地域間における差異を分析する。

2. 上総型坏について

上総型坏とは、ロクロを使用せずに成形された坏形の土師器である。内面に丁寧なナデの後、口縁部内外面にヨコナデが施される。外面は体部に1段または2

段の横方向のヘラ削りを施す。底部はヘラ削りを行うことでやや丸身を残した平底を呈する。色調は橙褐色、胎土はきめが細かく、水洗時に器面が溶けるほど脆いのが特徴である。また、この脆さが暗文の遺存しにくい要因にもなっている。この中で特に内面に斜格子状の暗文が施された個体について、「斜格子暗文坏」として扱う。

まず、上総型坏の形態と編年について、先学の研究から確認しておきたい。「上総型」という名称は宮本敬一氏によって提唱された。宮本氏は上総国分尼寺跡の調査報告の中で、「1と2は8世紀前半から9世紀前葉にかけてみられるロクロを使わないで作られ、底部と口縁部外面をヘラ削り調整した平底の坏形土器で器形の推移は口径が縮小し、器高が増すという方向を示す。8世紀中葉には口縁部内面に斜格子状、見込みに螺旋状暗文を施す上総国特有「上総型」と呼ぶべき坏形土器として完成される。」として、同時に年代観をも示した^{註3)}。

その後、松村恵司氏は山田水呑遺跡出土土器を分類する中で上総国分寺の調査成果を引用しつつ、「国分尼寺の調査に携わっている宮本敬一氏の御教授によると、現在までに把握された最も古手の土器は、斜格子状暗文を体部内面にもつ篋削り整形の平底の坏で、山田水呑遺跡第07号住居址の土器（挿図548-1）と同工の土器であることが確認された。上総国分寺の創建年代は必ずしも明らかではないが、一応この土器の年代を国分寺造営の詔が発布された天平13年（741）もしくは完工が督促された天平宝字3年（759）に近いものとして扱うことは許されるであろう。07住居址の出土土器はⅡ期に編年されることから、第Ⅱ期は8世紀中葉に比定されるものと考えられる。」として、斜格子暗文坏の年代観をより明かにした^{註4)}。

さらに、佐久間氏は「斜格子状暗文を有する土師器坏について」の中で、宮本氏の「上総型」の年代観を整理し、またタイプ分類、型式変化の検討を行ない、

それらについて実年代を当てはめるとともに斜格子暗文坏の出現と消滅についても検討を加えた。また、宮本氏が暗文を施した土師器坏のみをもって「上総型」としたのに対し、佐久間氏は「本稿において、A～Fタイプの斜格子状暗文を有する坏と、暗文がなくとも

同形態・同調整技法のものを含めて「上総型坏」として提唱したい。」^{註5)}とし、上総型坏の定義を明確に示した。佐久間氏が提唱した編年案は、それ以降の各遺跡出土土器編年における実年代決定の大きな根拠となっている。なお、佐久間氏の編年案を第1図に示す。

A	 袖ヶ浦市西ノ窪遺跡表土	口径	16.0cm前後
		底径	11.0cm前後
		器高	4.0cm前後
		暗文	0.3cm～0.5cm間隔で密
		年代	7世紀後半～8世紀第1四半期前半
B	 木更津市花山遺跡20号住	口径	16.0cm前後
		底径	10.0cm前後(Aより小さくなる)
		器高	4.0cm前後
		暗文	0.4cm～0.6cm間隔(Aより粗くなる)
		年代	8世紀第1四半期後半
C	 木更津市中台遺跡011号住	口径	14.5cm前後(Bより小さくなる)
		底径	10.0cm前後
		器高	3.5cm前後(Bより小さくなる)
		暗文	0.5cm～0.7cm(一層粗くなる)
		年代	8世紀第2四半期前半
D	 袖ヶ浦市清水川台遺跡第2号住 山田水呑遺跡拡張区07住	口径	
		底径	法量はCタイプとほとんど変わらない
		器高	
		暗文	0.7cm～1.0cm間隔(急激に粗くなる)
		年代	8世紀第2四半期後半
E	 袖ヶ浦市清水川台遺跡第6号住 市原市坊作遺跡9号住 木更津市花山遺跡044号住	口径	13.5cm前後(特に小さくなる)
		底径	10.0cm前後
		器高	3.0cm前後
		暗文	0.7cm～1.0cm間隔
		年代	8世紀第3四半期
F	 木更津市花山遺跡315住	口径	12.5cm前後(より小さくなる)
		底径	7.5cm前後
		器高	4.0cm前後(逆に大きくなる)
		暗文	0.7cm～1.5cm間隔(非常に粗くなる)
		年代	8世紀第4四半期～9世紀第1四半期前半

第1図 上総型坏タイプ分類図

3. 斜格子暗文坏の分析

1) 分布

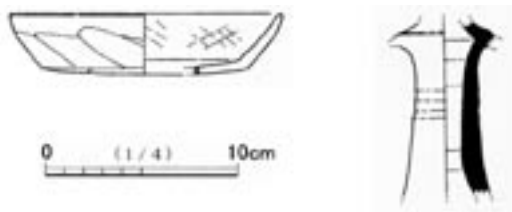
第2図は、斜格子暗文坏を出土した遺跡の分布図である^{註6)}。本項では、第1図にもとづいて下総国、上総国、安房国の順に、各国内で斜格子暗文坏が出土した遺跡の分布状況を述べ、併せてそれらの中から主な遺跡について概略を述べる。

a. 下総国

下総国では6遺跡から斜格子暗文坏が出土している(第2図1~6)。下総国内の分布状況は、国府に隣接する付近に2、下総国の中央付近に1が点在する以外は、3~6の4遺跡がすべて上総国との国境付近に分布し、かつ近接する位置にあるという傾向が認められる。

まず、嶋越遺跡(1)と印内台遺跡(2)は、古東海道またはその支道に近接する拠点集落またはその近隣集落として捉えることができる。

嶋越遺跡(1) 鹿島川下流域に立地する物井遺跡群内に位置する。本遺跡の北西側に稲荷台遺跡と小屋ノ内遺跡が立地しているが、この二遺跡は一連の遺跡と捉えられ^{註7)}物部郷の中心集落と考えられている。嶋越遺跡は拠点集落から若干離れた場所に展開する。斜格子暗文坏は8世紀代の竪穴住居跡から土師器甕、坏などとともに出土した。浄瓶が供伴したことが特筆される(第3図)^{註8)}。



第3図 嶋越遺跡出土土器実測図

印内台遺跡(2) 古墳時代後期から奈良・平安時代を主体とする大集落である。遺跡の立地する台地の南側の低地には砂州が形成され、そこに古東海道の敷設が想定され、古くから交通の要衝と考えられている。谷を隔てた西側台地上に位置する本郷台遺跡は『和名類聚抄』記載の「下総国葛飾郡栗原郷」に比定されており、本遺跡もその一部に属する。また、下総国府跡は北西約6.5kmに位置する。

次に3~6の4遺跡が集中する地域を見ていきたい。この一帯は上総と下総との国境にあたり、河曲駅

が置かれた交通の要衝地でもある。

観音塚遺跡(3) この地域の中核的な集落の様相を示すとともに、次の大北遺跡との関連が指摘されている。谷津を隔てた北側には8世紀第2四半期創建といわれる千葉寺が存在する。

大北遺跡(4) 本遺跡の性格については、官衛施設の一部として捉える可能性や、駅の補完施設とする説などがある^{註9)}。

種ヶ谷津遺跡(5) 大北遺跡の南東2.7kmに位置する。8世紀中葉の遺物集積地点から大量の土師器・須恵器とともに、奈良二彩・三彩がまとまって出土し、土器以外では佐波理製垂飾、青銅製・鉄製儀鏡、銅鈴などが検出された。祭祀遺跡でみられる儀鏡や鈴、三彩の共伴は本遺跡が祭祀にかかわる場所であることをうかがわせる。県内最多の出土量を数える施釉陶器や特殊な出土遺物から、国越えの儀式の行われた可能性も考えられる特殊な遺跡である^{註10)}。

高沢遺跡(6) 種ヶ谷津遺跡の南側に隣接する。5世紀から10世紀にかけて営まれた大集落であり、土師器・須恵器の出土量も膨大で、土器編年の基準資料となっている。鉄製品の出土量も多く、仏教関連遺物も検出されている。

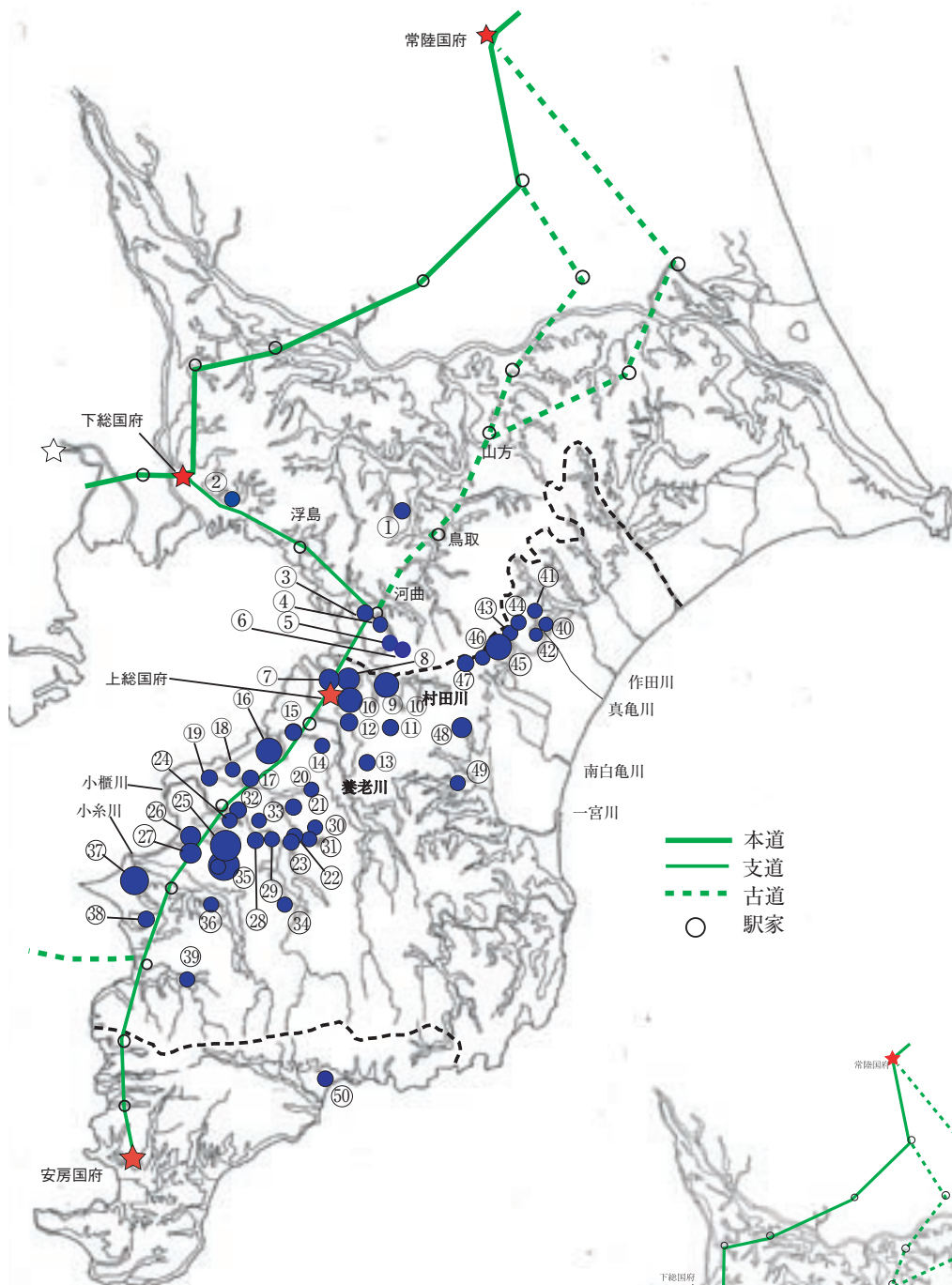
b. 上総国

上総国では70遺跡から斜格子暗文坏が出土している(第2図7~49、第1表7~76)。筆者はこれまで上総国内においては、斜格子暗文坏は普遍的に分布しているものと考えていた。しかし、斜格子暗文坏が出土した遺跡を地図上にプロットしてみると、東京湾岸の地域に遺跡が集中することが明らかとなった。また、それらを以下の3つの地域にくることが可能であると考えられる。A地域：東京湾岸で古東海道が房総半島に上陸し、上総国府に向かう古道沿いの地域。B地域：上総国府・上総国分寺周辺地域。C地域：太平洋側の九十九里南部地域。なお、上記の3地域に含まれない遺跡が分布する範囲をD地域とする(第4図)。

A地域：この地域の特徴は、ほぼ古東海道に沿う形で遺跡が分布していることである。また他の地域に比べ遺跡数と斜格子暗文坏の出土量が圧倒的に多いことである。

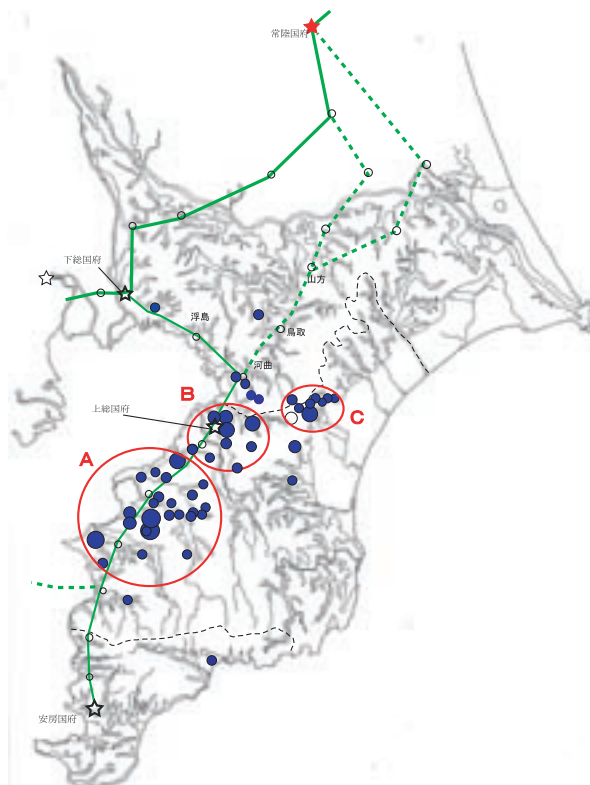
上大城遺跡(24) 瓦塔片など仏教関連遺物が多く出土している。複数の文字と人面が描かれた墨書土器も出土している。

八重門田遺跡(25) 上大城遺跡の東に隣接する。8



第2図 斜格子暗文坏出土分布図

* 遺跡集中地点は地図No.を一つにして複数遺跡を表している（円を大きくしている）。対応は第1表の地図No.と遺跡No.で確認いただきたい。



第4図 上総国地域別分布図

世紀後半から集落の終息を迎える9世紀前半にかけて操業されていた鍛冶工房跡が検出されている。

雷塚遺跡 (28) 住居跡のほかに、上位階層の墳墓と考えられている方形墳墓の検出とともに、製鉄に関する遺物の出土がみられ、鍛冶工房の存在が考察されている。また、畿内産土師器や甲斐型坏の出土が目される。

永吉台遺跡 (30) 小櫃川の支流松川流域に位置する。竪穴住居跡のほか、8世紀末ころに成立した4間×5間の四面廂建物をはじめとした礎石建物を含む建物群が検出されている。出土遺物には仏教に関するものや、「土寺」を始めとして多くの墨書土器が出土し、村落内寺院の存在が明らかとなった。

上宮田台遺跡 (32) 小櫃川の支流槍水川右岸の台地上に立地する。本遺跡は製鉄集落と捉えられており、単独の鍛冶遺構や住居内鍛冶施設が検出されている。製鉄関連遺物も多量に出土している。

下谷遺跡 (33) 小櫃川の支流槍水川左岸の台地上に立地し、槍水川をはさんで上宮田台遺跡と対峙する位置にある。遺跡からは溝で区画された四面廂掘立柱建物が検出されている。また、8世紀前半代に築かれた方形墳墓の主体部からは、貝層とともに火葬人骨が出土した。

大畑台遺跡群には大畑台遺跡、小谷遺跡、中台遺跡がある。

大畑台遺跡 (35) 古墳時代前期から平安時代の集落と墓域が検出された。竪穴住居跡のほか掘立柱建物、方形墳墓、火葬墓などが確認された。

小谷遺跡 (36) 集落・墓域・寺院という集落構成が確認された。小型瓦のみで葺かれていた基壇建物や、空間を囲む形で掘立柱建物が検出された。また、2セットあるいは3セットになると考えられる8世紀後葉の瓦塔破片などが出土した。

中台遺跡 (37) 古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

大門口遺跡 (38)・金二矢台遺跡 (39) 8世紀後半から9世紀前半の竪穴住居跡が検出されている。

南羽鳥遺跡 (40) 8世紀後半から9世紀初頭に比定される土坑内から、3個体の斜格子暗文坏を転用した骨蔵器が検出された。1個を身とし、2個体を蓋として重ねた状態で検出された。

小浜遺跡群は小櫃川水系と小糸川水系の中間に位置する海岸線に面した丘陵状に展開する。遺跡群の北部にはマミヤク遺跡、俵ヶ谷遺跡、南部には山神遺跡、

中越遺跡が位置する。

マミヤク遺跡 (41)・俵ヶ谷遺跡 (42) 弥生時代から奈良時代にかけての一連の集落遺跡である。

山神遺跡 (43) 8世紀に形成された竪穴住居跡と大型の掘立柱建物跡を含む集落である。

花山遺跡 (45) 海岸線から6kmほど入った矢那川流域に位置する集落跡である。鞆羽口の出土から小鍛冶の存在が指摘されている。

久野遺跡 (46) 山寺・山林寺院と考えられる8世紀後半の基壇建物跡が検出されている。また、鍛冶遺構が検出されており、寺院への資材供給のための遺構と位置づけられている。

丹過遺跡 (47) 小櫃川中流域に位置する。大型の掘立柱建物を中心とする約50棟の建物群で構成されており、奈良時代の官衙関連遺跡と考えられている。

上総大寺廃寺 (49) 上総国で最古の古代寺院跡である。

野洞遺跡 (50) 8世紀前半代に限定される竪穴住居跡と、ほぼ同時期に成立した区画墓が検出された。

大井戸八木遺跡 (51) 方形区画墓が検出され、4基中2基から火葬骨の埋納された骨蔵器が出土した。蓋に斜格子暗文坏が使われている。

三直中郷遺跡 (53) 古代の水田が検出された。

南子安金井遺跡 (54) 8世紀後半に古代の集落が開始され、隣接する九十九坊廃寺との関連と考えられている。寺域内を区画する溝が確認された。掘立柱建物と鉄鍛錬鍛造の工房跡が検出された。

常代遺跡 (55) 古墳時代から平安時代の集落、四面廂の建物を含む掘立柱建物が検出されている。

踊ヶ作遺跡 (56) 火葬墓が41基検出された。火葬の起源とされる8世紀初頭から数十年の後に開始されたと考察されている。

郡遺跡 (57) 古墳時代から古代にかけて継続的に行われていたと思われる祭祀遺構や、小糸川流域に存在した須恵国造本宗家の居館と考えられる遺構が検出された。

東冠遺跡 (58)・明神山遺跡 (59)・狐塚遺跡 (60)・亀塚遺跡 (61) は小糸川下流域に位置し、内裏塚古墳をはじめとした多くの古墳が点在する中に立地する。

B地域：この地域は国分寺関係、国府関連遺跡が存在し、上総国の中心的地域である。

荒久遺跡 (15) 上総国分僧寺跡 (17) の東側に隣接し、僧寺運営にかかわる集落である。

坊作遺跡 (9) 上総国分僧寺跡の北東に上総国分尼寺

第1表 斜格子暗文坏出土遺跡一覧

地域	遺跡No.	地図No.	遺跡名	出土数	遺跡種類	資料No.	備考	報告書
下 総	1	1	嶋越遺跡	1	c 5	6		整理中
	2	2	印内台遺跡	1	c 5	1	畿内産土師器出土	「印内台遺跡(43)」2007 船橋市教育委員会
	3	3	観音塚遺跡	1	c 5	7	畿内産土師器出土	「千葉市観音塚遺跡・地藏山遺跡(3)」2004(財)千葉県教育振興財団
	4	4	大北遺跡	1	c 1	2	畿内産土師器出土	「大北遺跡・谷津遺跡・爪作遺跡・池田古墳群」1986(財)千葉県文化財センター
	5	5	種ヶ谷津遺跡	10	c 2	3.4.8.9.10~15	畿内産土師器出土	「千葉市種ヶ谷津遺跡」1985(財)千葉県文化財センター 「主要地方道生実・本納線埋蔵文化財報告書2」1998同右
	6	6	高沢遺跡	1	c 2	5		「千葉東南部ニュータウン17」1990(財)千葉県文化財センター
上 総	7	7	加茂遺跡	5	c 5	21~25		「市原市加茂遺跡A・B地点」2005(財)市原市文化財センター
	8	7	台遺跡	4	c 5	17~20	畿内産土師器出土	「市原市台遺跡B地点」2003 「市原市台遺跡C地点」2010市原市教育委員会
	9	8	坊作遺跡	20	c 1	26~45		「上総国分寺台発掘調査概報」1977上総国分寺台発掘調査団 「坊作遺跡」2002市原市教育委員会
	10	8	郡本遺跡	1	b	46		「市原市郡本遺跡」1987(財)市原市文化財センター
	11	8	稲荷台遺跡	3	b	47~49		「平成11年市原市内遺跡発掘調査報告稲荷台遺跡」2003市原市教育委員会
	12	9	川焼台遺跡	3	c 4	50.51.53		「千原台ニュータウンX X I」2009(財)千葉県教育振興財団
	13	9	草刈遺跡	1	c 5	52		「千原台ニュータウンX X VII」2011(財)千葉県教育振興財団
	14	9	押沼大六天遺跡	1	c 5	56		「千原台ニュータウンX II」2004(財)千葉県教育振興財団
	15	10	荒久遺跡	2	c 1	54.55		「市原市荒久遺跡B・C地点」2011 市原市教育委員会
	16	10	上総国府推定地	1	b	57		「市原市上総国府推定地確認調査報告書(1)」1994(財)市原市文化財センター
	17	10	上総国分僧寺跡	45	a	58~100		「上総国分僧寺跡I」2009 市原教育委員会
	18	11	文作遺跡	5	c 5	101~104		「市原市文作遺跡」1989(財)市原市文化財センター
	19	12	西野遺跡	4	b	105.106.113		「市原市西野遺跡・白山遺跡・村上遺跡発掘調査報告書」1989(財)千葉県文化財センター 「市原市海上地区遺跡群」2005(財)市原市文化財センター
	20	13	山田遺跡群	1	d	114		「市原市山田遺跡群」2009 市原市教育委員会
	21	14	今富遺跡	1	c 5	115		「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書2」1998(財)千葉県文化財センター
	22	15	五霊台遺跡	2	c 5	110.111		「市原市五霊台遺跡」1998(財)市原市文化財センター
	23	16	清水川台遺跡	3	c 5	116~118		「清水川台遺跡発掘調査報告書」1983(財)君津郡市文化財センター
	24	16	上大城遺跡	1	c2	119		「袖ヶ浦椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書上大城遺跡II」2005(財)君津郡市文化財センター
	25	16	八重門田遺跡	2	c 4	120.121		「袖ヶ浦椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書八重門田遺跡」2005(財)君津郡市文化財センター
	26	16	神田遺跡	6	c 5	122~126		「神田遺跡II」2000(財)君津郡市文化財センター
	27	17	西ノ窪遺跡	1	c 5	127		「西ノ窪遺跡」1985西ノ窪遺跡調査会
	28	18	雷塚遺跡	16	c 4	128~143	畿内産土師器出土	「雷塚遺跡」1999(財)君津郡市文化財センター
	29	19	神納三俣台遺跡	4	c 5	144.145		「神納三俣台遺跡」1997(財)君津郡市文化財センター
	30	20	永吉台遺跡	2	c 2	146.147		「永吉台遺跡群」1985(財)君津郡市文化財センター
	31	21	文協遺跡	3	c 2	148~150		「文協遺跡」1992(財)君津郡市文化財センター
	32	22	上宮田台遺跡	8	c 4	151~154.156		「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書8」2008(財)千葉県教育振興財団
	33	23	下谷遺跡	1	c 3	155		「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書6」2007(財)千葉県教育振興財団
	34	24	菅生第2遺跡	1	d	157		「木更津市菅生第2遺跡」1978菅生遺跡調査会
	35	25	大畑台遺跡群大畑台遺跡	40	c 3	158~195		「大畑台遺跡群発掘調査報告書II」1997「大畑台遺跡群発掘調査報告書VII」2004「大畑台遺跡群発掘調査報告書XI」2011木更津市教育委員会
	36	25	〃 小谷遺跡	29	c 2	196.199~209		「大畑台遺跡群発掘調査報告書III」1998「大畑台遺跡群発掘調査報告書VII」2003木更津市教育委員会
	37	25	〃 中台遺跡	17	c 5	197.198.210~220		「大畑台遺跡群発掘調査報告書V」2001 木更津市教育委員会
	38	25	大門口遺跡	1	c 5	221		「東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書3」2005(財)千葉県文化財センター

地域	遺跡No	地図No	遺跡名	出土数	遺跡種類	資料No	備考	報告書
上総	39	25	金二矢台遺跡	1	c 5	-		「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書6」2000 (財)千葉県文化財センター
	40	25	南羽鳥遺跡	3	c 3	223~226		「東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書2」2004 (財)千葉県文化財センター
	41	26	小浜遺跡群 マミヤク遺跡	9	c 5	222.227~234		「小浜遺跡群Ⅱマミヤク遺跡」1989 君津郡市考古資料刊行会
	42	26	〃 俵ヶ谷遺跡	7	c 5	235~241		「小浜遺跡群Ⅳ俵ヶ谷遺跡」1991 (財)君津郡市文化財センター
	43	27	山神遺跡	17	c 5	242~255.265		「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書12」2003 (財)千葉県文化財センター
	44	27	中越遺跡	12	c 5	256~264.266		「中越遺跡」1997 (財)君津郡市文化財センター 「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書11」2002 (財)千葉県文化財センター
	45	28	花山遺跡	17	c 5	267~290.296		「花山遺跡」1988 (財)君津郡市文化財センター
	46	29	久野遺跡	2	c 2	292.297		「矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書2」1999 (財)千葉県文化財センター
	47	30	丹過遺跡	10	b	291.293~295.298~302	畿内産土師器出土	「丹過遺跡確認調査報告書」1988 木更津市教育委員会 「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書5」2006 (財)千葉県教育振興財団
	48	31	沢間Ⅰ遺跡	1	d	303		「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書2」2005 (財)千葉県教育振興財団
	49	32	上総大寺廃寺	1	a	304		「千葉県史 資料編39上総大寺廃寺」
	50	33	野洞遺跡	5	c 3	305~309		「首都圏中央連絡自動車道(木更津~東金)埋蔵文化財調査報告書」2005 (財)君津郡市文化財センター
	51	34	大井戸八木遺跡	2	c 3	330.331		「大井戸八木遺跡・大井戸八木古墳群Ⅱ」2010 君津市教育委員会
	52	35	練木遺跡	4	c 3	314~317		「東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書1」2003 (財)千葉県文化財センター
	53	35	三直中郷遺跡	1	c 5	324		「三直中郷遺跡発掘調査報告書」2001 (財)君津郡市文化財センター
	54	35	南子安金井崎遺跡	7	c 4	310~312		「九十九坊廃寺関連南子安金井崎遺跡」1996 (財)君津郡市文化財センター
	55	35	常代遺跡	17	c 5	318~323 1. 3 2 5. 3 2 6		「常代遺跡群」1996 君津郡市考古資料刊行会
	56	35	踊ヶ作遺跡	3	c 3	327~329		「東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書6」2006 (財)千葉県教育振興財団
	57	36	郡遺跡群	2	c 2	313		「郡遺跡群発掘調査報告書Ⅱ」1996 (財)君津郡市文化財センター
	58	37	東冠遺跡	4	d	332~334.336		「東冠遺跡発掘調査報告書」1993 富津市教育委員会
	59	37	神明山遺跡	1	d	340		「神明山遺跡発掘調査報告書」1993 富津市教育委員会
	60	37	狐塚遺跡	4	c 5	335.337~339		「狐塚遺跡発掘調査報告書」1995 君津郡市考古資料刊行会
	61	37	亀塚遺跡	2	c 5	431		「亀塚遺跡」1997 「亀塚遺跡2」2003 (財)君津郡市文化財センター
	62	38	川島遺跡	3	d	342~344		「川島遺跡発掘調査報告書」1991 「川島遺跡第2地点 大明神原遺跡第2地点」2005 (財)君津郡市文化財センター
	63	39	宮花輪遺跡	1	c 5	345		「宮花輪遺跡」1990 (財)君津郡市文化財センター
	64	40	久我台遺跡	1	c 2	346	畿内産土師器出土	「東金市久我台遺跡」1988 (財)千葉県文化財センター
	65	41	妙経遺跡	2	c 5	347	畿内産土師器出土	「妙経遺跡・井戸谷9号墳」1994 (財)千葉県文化財センター
	66	42	椎木台遺跡	1	c 5	348.363	畿内産土師器出土	「東金台遺跡Ⅱ」1998 (財)総南文化財センター
	67	43	油井古塚原遺跡群東滝台遺跡	6	c 2	349.352.353		「油井古塚原遺跡群」1995 (財)山武郡市文化財センター
	68	44	作畑遺跡	1	c 2	354		「作畑遺跡」1986 作畑遺跡調査会
	69	45	小野山田遺跡群鉢ヶ谷遺跡	3	c 2	359.36		「小野山田遺跡群Ⅰ」2000 (財)山武郡市文化財センター
	70	45	〃 羽戸遺跡	2	c 2	350.351		「小野山田遺跡群Ⅱ」2001 (財)山武郡市文化財センター
	71	45	〃 尾亭遺跡	1	c 5	356		「小野山田遺跡群Ⅲ」2001 (財)山武郡市文化財センター
	72	46	山田水呑遺跡	1	c 2	358		「山田水呑遺跡」1977 山田遺跡調査会
73	47	辰ヶ台遺跡	1	c 5	16		「千葉市辰ヶ台・住吉・東住吉遺跡」1989 (財)千葉市文化財調査協会	
74	48	金谷郷遺跡群台前遺跡	2	c 5	361		「台前遺跡 上引切遺跡」1996 (財)山武郡市文化財センター	
75	48	〃 山荒久遺跡	1	c 2	362		「金谷郷遺跡群Ⅰ」1996 (財)山武郡市文化財センター	
76	49	中原遺跡	3	c 5	357		「中原遺跡」1994 (財)長生郡市文化財センター	
安房	77	50	東条地区遺跡群中原条里跡	19	c 5	364~378		「東条地区遺跡発掘調査概報」1997 鴨川市遺跡調査会 「東条地区遺跡群発掘調査報告書」2000 鴨川市遺跡調査会

が隣接する。遺跡は上総国分尼寺跡の北側に位置する。荒久遺跡が僧寺と対応関係にあるように、本遺跡は尼寺と対応関係にある遺跡である。

稲荷台遺跡 (11) 谷をはさんで坊作遺跡の東側に位置する。規則的に並ぶ掘立柱建物群や祭祀遺構などが検出され官衙の様相をもつ遺跡である。

国府推定地 (古甲地区) (16) 郡本遺跡 (8) と同じく稲荷台遺跡の北側に位置する。

加茂遺跡 (7) 国分僧寺の北側に位置する。古墳時代の集落と奈良時代の祭祀遺構が検出された。

台遺跡 (8) 国分僧寺の北側に位置する。弥生時代中期から古墳時代後期にかけて営まれた、700軒を超える大集落である。後の国分寺を支える基盤集落と考えられている。

西野遺跡 (19) 国分寺の南、養老川の対岸に位置する。『和妙類聚抄』にある上海上郡の郡衙推定地である。

川焼台遺跡 (12) 下総との国境付近に位置する。国分寺創建時瓦を生産した川焼瓦窯の操業開始を契機に成立し、瓦工人集団によって営まれた集落と考えられている。

押沼大六天遺跡 (14) 鍛冶を中心とした製鉄関連遺構を多数検出した。

C地域

久我台遺跡 (64) 真亀川流域に位置し、古墳時代から継続的に営まれるいわゆる継続的集落。特に遺跡は真亀川流域の拠点集落である。畿内産土師器が出土している。

妙経遺跡 (65)・椎木台遺跡 (66) 真亀川流域に位置し、古墳時代から継続的に営まれるいわゆる継続的集落。畿内産土師器が出土している。

真亀川上流域にあたる上総国山辺郡を中心とした地域には、郡領クラスの有力地方豪族によって開発が行われたと考えられている作畑遺跡、山田水呑遺跡がある^{註11)}。

作畑遺跡 (68) 「山口家」「山口万」の墨書土器が出土している。

山田水呑遺跡 (72) 「山邊」「山口館」の墨書土器が出土している。

辰ヶ台遺跡 (73) 小集落であるが、直近に8世紀後半代創建の小食土廃寺が位置し、郡衙推定地の一つにあげられる地域に位置する。

真亀川と南に流れる南白亀川に挟まれた台地上に**鉢ヶ谷遺跡 (69)・羽戸遺跡 (70)・尾亭遺跡 (71)** が

立地する。

D地域

南白亀川流域の金谷郷遺跡群を構成する**台前遺跡 (74)・山荒久遺跡 (75)** は、国司等の有力官人層あるいは上総国分寺が大きくかかわって開発されたと考えられている牧であり、その後の初期荘園として成立していく前身と捉えられている地域とされている^{註12)}。**中原遺跡 (76)** 九十九里砂丘に立地する古墳時代後期から奈良時代の小規模集落である。

c. 安房国

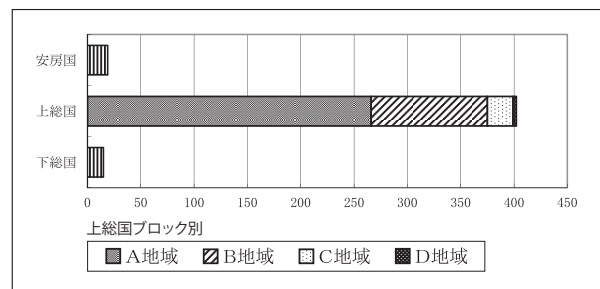
房総半島先端に位置する安房郡内に畿内産土師器が出土する健田遺跡がある。平城京出土木簡にも記載されている朝夷郡健田郷である。そこから北東方向20kmに東条地区遺跡群がある。

東条地区遺跡群 (77) 集落跡や条里跡が確認されている。

2) 出土量と遺跡の性格

① 遺跡間での出土量の比較

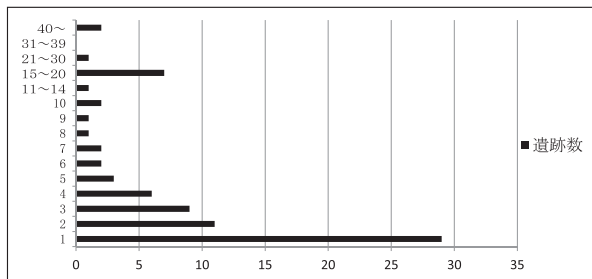
各遺跡から出土した斜格子暗文坏の数量を第1表に示した。第2表はそれをもとに、下総・上総・安房の三国間の出土量を比較したものである^{註13)}。このグラフから上総国内での出土量が多いことが分かる。また、上総国内でも、A地域の出土量が上総国内全体出土量の約2/3を占めている。



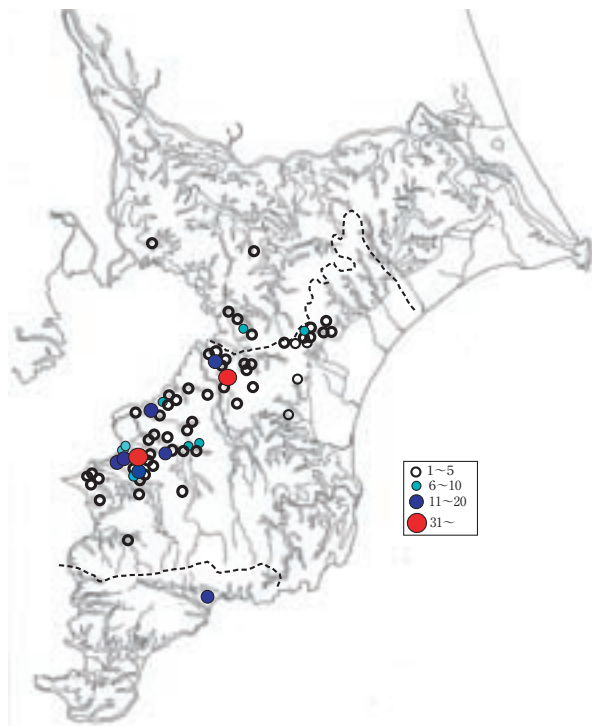
第2表 斜格子暗文坏出土数三国間比較

次に、第3表には、各遺跡の出土数を示した。出土数が1点のみの遺跡は、77遺跡中29遺跡で38% (約1/3強) を占める。1遺跡あたり2~9点の出土数までは、漸移的に減少するが、10点・15~20点・40点以上にピークが存在する特徴を示す。第5図は第3表にもとづいて作成した出土数毎の分布図である。出土数が1~5点の遺跡が60遺跡にも及び、圧倒的多数を占める。

上総国に注目すると、出土数が1～5点の遺跡はA・B・Cの地域に万遍なく分布している。出土数が6～10点の遺跡もこれら3地域に認められるが、出土数が11点以上の遺跡はA・Bの2地域に限られ、C地域には認められない。出土数が11点から20点の遺跡はA地域に4か所、B地域に1か所認められる。A地域の内訳は山神遺跡(43)・花山遺跡(45)・常代遺跡(55)の17点、雷塚遺跡(28)の16点、B地域の内訳は、上総国分尼寺の造寺集落として位置づけられる坊作遺跡(9)が20点である。出土数が31点以上の遺跡は、A・Bの2地域に各1か所認められる。A地域は、大畑遺跡群(35～37)の総数86点、B地域は上総国分僧寺(17)の45点である。上総国以外では安房国内の東条地区遺跡群(77)から19点出土していることが注目される。



第3表 斜格子暗文杯出土数遺跡間比較



第5図 斜格子暗文杯出土数分布図

②遺跡の性格による出土量の比較

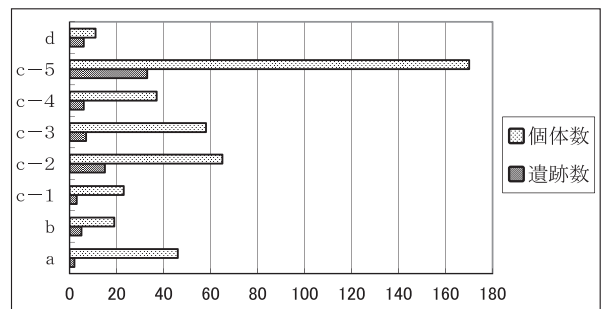
斜格子暗文杯を出土した遺跡には、一般の集落、

国分寺、国府などの官衙関係の遺跡など様々な種類のものが含まれる。そこで、それらを整理・分類し、それらの遺跡と出土数とのあいだの相関性について検討する。

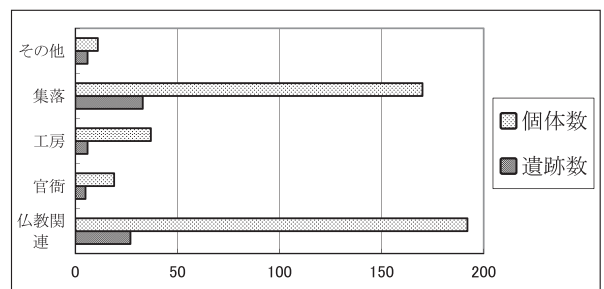
斜格子暗文を出土した遺跡を遺跡の性格ごとに以下のように分類する^{註14)}。

- a類：寺院
- b類：国府・官衙関連遺跡
- c類：集落
 - c 1類：国分寺・関連集落
 - c 2類：寺院関連遺物出土・村落内寺院を有する集落・祭祀関連集落
 - c 3類：火葬墓、埋葬関係集落
 - c 4類：製鉄・鍛冶工房集落・瓦窯工人集落等の生産集落
 - c 5類：一般集落

第4表に各類の遺跡数と斜格子暗文杯の出土数を示した。第4表からc 5類(一般的集落)の遺跡数および出土数が最も多いことが分かる。ところが、寺院(a類)と寺院関連集落(c 1～3類)の遺跡および出土数をまとめてみると、第5表のようになる。第5表では、一般集落(c 5類)の遺跡数がやはり多いものの、斜格子暗文杯の出土数は、寺院(a類)および寺院関連集落(c 1～3類)出土数が一般集落の出土数をはるかに上まわる。



第4表 遺跡性格別出土数比較①



第5表 遺跡性格別出土数比較②

3) 畿内産土師器との関係

第6図は、下総・上総・安房の三国における畿内産土師器出土遺跡を地図上にプロットしたものである^{註15)}。現時点で確認できる畿内産土師器出土遺跡数は37遺跡で、その内訳は下総国27遺跡（約73%）、上総国10遺跡（25%）、安房国1遺跡（約2%）であり、畿内産土師器出土遺跡は下総国内に集中する。

また、上総国内における畿内産土師器出土遺跡は、斜格子暗文杯が集中的に分布するA～Cの地域と重なることが分かる。その内訳は、A地域：内裏塚古墳群にある割見塚古墳（7世紀前半代築造）、雷塚遺跡と丹過遺跡、B地域：国分寺や国府推定地近隣に位置する千草山遺跡と台遺跡、C地域：久我台遺跡、妙経遺跡、椎木台遺跡、丸山遺跡である。特にC地域に出土が集中する傾向がうかがえる。

4. 問題点の抽出

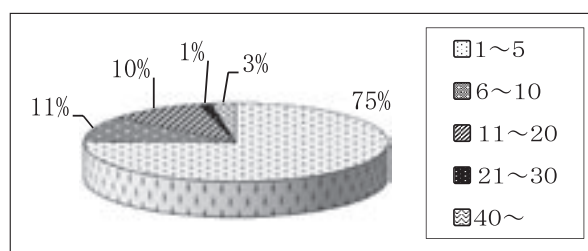
ここでは、前項の分析結果にもとづいて、下総・上総・安房の三国に分布する斜格子暗文杯に関する問題点を提示する。

1) 分布

3-1) で述べたように、斜格子暗文杯は下総・上総・安房の三国に分布するが、上総国内の遺跡数・出土量が圧倒的多数を占めている。また、上総国内の斜格子暗文杯出土遺跡は国内に一様に分布するのではなく、A～Cの地域的まとまりのあることが分かった。したがって、上記の分布状況には、何らかの歴史的背景が存在するものと思われる。

2) 出土量

第6表は、第3表をもとに1遺跡あたりの斜格子暗文杯の出土数の割合を示したものである。これを見ると斜格子暗文杯が1～5点出土した遺跡が全体の75%を占めている。それに対して、出土数が11点以上または21点以上という遺跡が全体の各1割を占めている。また、遺跡数はわずかではあるが、1遺跡または遺跡群から40点以上出土するものも認められる。1遺跡からの出土数が少量であることは、斜格子暗文杯が日常的に使用する目的で作られたものではないことを示唆しており、1遺跡から多数出土する場合は、その遺跡での使用状況とともに、その遺跡の性格をも示唆しているものと考えられる。



第6表 出土数別の割合

3) 遺跡の性格

第7表は、第5表にもとづいて遺跡の性格別出土数の割合を示したものである。仏教または祭祀などに関する遺跡からの出土数の割合が45%で、全体の約半数弱を占めていることが分かる。

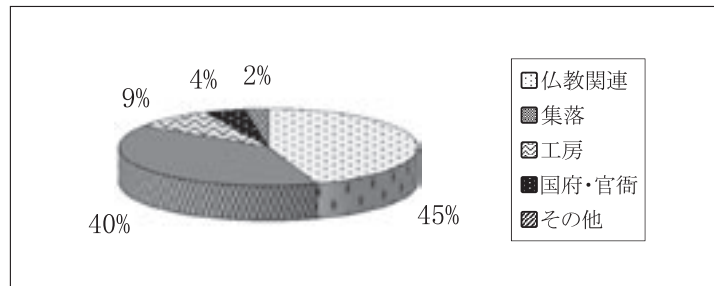
第8表は出土数の遺跡性格別内訳である。例えば、1～5個体を出土する遺跡を性格別に分類すると、一般集落出土数が全体の42%を占め最多である。次に出土数が多いのは村落内寺院などのある遺跡で22%である。ところが、1遺跡からの出土数が多い場合、例えば21個体以上は村落内寺院などがある集落、40個体以上は寺院と火葬墓などを含む集落が占めており、1遺跡からの出土数が多くなるにつれて、斜格子暗文杯を出土する遺跡は仏教色を有するものに絞られていく傾向がうかがえる。

以上のことから、斜格子暗文杯は仏教と何らかの関連を有する可能性が考えられる。そこで、そのような視点から以下のいくつかの遺跡について検討を加えてみたい。

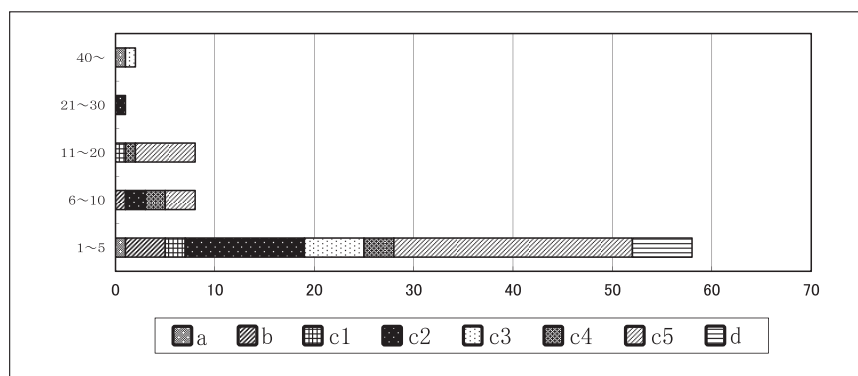
まず、上総国C地域に位置する作畑遺跡と久我台遺跡では「弘貫」と書かれた同一文字の墨書土器が出土した。「弘貫」は僧侶の名前と考えられ、作畑遺跡は仏教色の強い遺跡と位置づけられている。作畑遺跡と同一の墨書が出土した久我台遺跡からは、仏教に関連する遺構・遺物などは検出されていないが、本拠地を作畑遺跡に置いた私度僧の活動が久我台遺跡に及んだ結果であると、両遺跡の関係が考察されている^{註16)}。また、下総国にも興味深い事例がある。前述した嶋越遺跡の位置する物井遺跡群は、拠点集落の小屋ノ内遺跡や稲荷塚遺跡などと、古墳や方形墳墓などが検出された御山遺跡などが展開する墓域で構成されている。嶋越遺跡からは、寺院的な遺構は検出されなかったが、墓域とされる御山遺跡とは1km程度の至近距離にある。このような立地関係にある嶋越遺跡から浄瓶が出土したことは、作畑遺跡と久我台遺跡の関係と同様に私度僧などの



第6図 畿内産土師器出土分布図



第7表 遺跡の性格別出土数の割合



第8表 一遺跡における出土数比較と遺跡の性格

存在を示唆しているものとする(笹生1998)^{註17)}。

次に仏教色の強い火葬墓についてみると、南羽鳥遺跡や大井戸八木遺跡例のように斜格子暗文環が骨蔵器の蓋に使用されているものがある^{註18)}。奈良時代の火葬の対象者は、一般民衆というよりも一帯の有力者または僧尼のような宗教者であった可能性が高い。従って、斜格子暗文はこれらの被葬者層と関わる何らかの特殊性を示していると思われる。

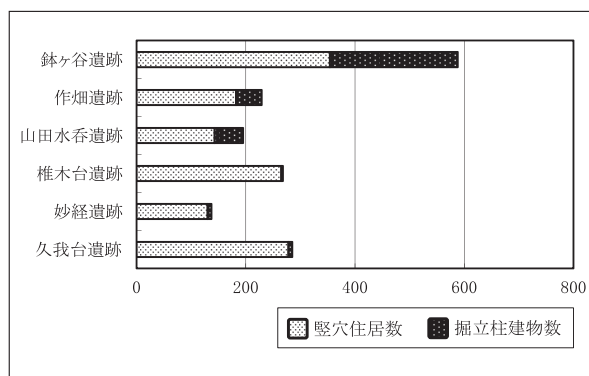
仏教とは同一視できないが、種ヶ谷遺跡をはじめとした祭祀遺跡では、祭祀の際に使用された可能性を示唆する出土状況が認められる。したがって、斜格子暗文環は、仏教やその他の祭祀にかかわり使用された器の可能性が考えられる。

遺跡数の割合は低いものの、製鉄関係・鍛冶工房・瓦窯工人集落などの工房跡を有する遺跡についても注目する必要がある。国分寺や官衙施設の造営やその後の修復、集落においては村落内寺院など大規模な建物などの建築に鉄製品は不可欠なものである。川焼台遺跡は前述のとおり、国分寺創建時瓦の製作工人によって拓かれた集落である。そのような集落から斜格子暗文環が出土する事実は、国分寺をはじめとする諸寺院との関係が深かったことをも示唆していると考えられる。

4) 畿内産土師器との関係

3-3)で述べたように、畿内産土師器が出土する遺跡は下総国に集中し、上総国で出土が確認された遺跡はわずかに7遺跡にとどまる。また、上総国内の7遺跡のうち4遺跡がC地域に集中する。このC地域内で畿内産土師器と斜格子暗文の両者が出土した遺跡は、他の斜格子暗文環出土の遺跡と比べて、極端に掘立柱建物の割合が低いという共通点がある。逆に畿内産土師器の出土しないグループは、周辺の69~71の小野山田遺跡群をも含めて堅穴住居に対する掘立柱建物の割合が高くなっていることが注目される(第9表)。

前者は古墳時代から継続的に営まれてきた継続型集落、後者は国司や国分寺の関与で開発された開発型集落であり、両者の性格の相違が畿内産土師器の出土傾向を反映している可能性が考えられる。これに対して、斜格子暗文環の出土傾向には両者間に顕著な相違が認められない。したがって、遺跡間における畿内産土師器の出土傾向と斜格子暗文環のそれとを比較することによって、斜格子暗文環が有する



第9表 堅穴住居跡と掘立柱建物跡の占める割合

性格をより闡明にできる可能性があると思われる。

ところで、東日本における畿内産土師器の搬入については、林部均氏の先行研究がある。林部氏は、東日本における畿内産土師器の出土について、「交通の要所や、古墳時代以来の拠点的地域」に集中する傾向があると指摘する。例えば、「印旛沼・手賀沼の周辺は、古墳時代以来、印播国造が勢力を保持し続けた地域」であり、下総国内から畿内産土師器が多数出土する理由を印播国造との関係で理解する(林部1986)^{註19)}。しかしながら、この説は下総国内については解釈が可能であっても、畿内産土師器の出土が希薄な上総国内については説明することができない。上総国内には木更津市の高部30・32号墳、市原市の神門3~5号墳など畿内の庄内式併行期にさかのぼる古墳が築造され、古墳時代中期から後期にかけては富津市域に内裏塚古墳群、木更津市域に姉ヶ崎古墳群など墳長100mをこえる前方後円墳を盟主とする古墳群が造営される。しかも、上総国は古東海道沿いに、浦賀水道を舟で渡り最初に上陸する交通の要衝でもある。林部氏の説に従うならば、上総国においても当然多数の畿内産土師器が出土するはずであろう。しかし、考古学的事実に基づく限り上総国内からの畿内産土師器の出土量は僅少である。

それでは、なぜ上総国内における畿内産土師器の出土数が少ないのだろうか。林部氏は国衙や国分寺が整備され地域支配の一応の完成をみた、平城Ⅳ期以降に東日本への畿内産土師器の搬入はみられなくなるとし、この現象を東日本と畿内との交渉がなくなったのではなく、畿内産土師器を要する交渉の必要性がなくなったことを意味しているという^{註20)}。この考え方に立つならば、上総国の範囲においては、古墳時代にすでに畿内との強力なつながりが成立

し、畿内産土師器を介した交渉の必要性がなかったと考えることもできよう。

ところが一方で、畿内産土師器の出土量が少ない上総国内からは、斜格子暗文坏が大量に出土している。この現象をどのように考えるべきであろうか。従來說かれているように斜格子暗文坏は、畿内産土師器と同様な性格のもとに使用されたものなのであろうか。畿内産土師器と斜格子暗文坏の消長と各遺跡への搬入の時期的経過を追うことによって、これらの問題を解決できる糸口が得られるかもしれない。

5. 終りに

今回、斜格子暗文坏の分布と出土遺跡の性格を検討することによって、斜格子暗文坏が仏教文化と何らかの関係の有する可能性を示唆することができた。しかしながら、前述したとおり遺物の実見をするまでには至らず、個別の資料について型式分類や時期決定はできなかつた。

今後本研究を進めるべく、資料を熟覧し、斜格子暗文坏に施された暗文の詳細情報を収集したいと考えている。各個体の法量と暗文の施文方法を総合的に分析することで、斜格子暗文坏の編年を行い、斜格子暗文坏の成立と消長、時期別の出土状況などを検討することによって、今回の分析をさらに一歩進めていきたいと思う。また、各個体の共伴遺物の検討を加えることと、今回は斜格子暗文坏に限定したが、暗文が施されていない上総型坏についても分析し、上総型坏にのみ斜格子状の暗文が施された意味についても考えていきたい。

広域的な分析の必要性も感じている。房総以外の地域、遠くは東北地方にも出土例が知られている。関東系の土器が東北地方で出土していることは周知のことであるが、この関東系土器の中における斜格子暗文坏の存在意義も興味深い^{註21)}。また、相模湾地域に同様に畿内産土師器の模倣とされている坏が存在している^{註22)}。二段の暗文が施されることは畿内産土師器の暗文に近似するが、上段が斜めに傾くのである。斜格子暗文坏の成立には畿内産土師器の影響は不可欠であったのであろうか。しかし畿内の土師器を管見するに、斜格子の暗文が施された例は見当たらない。何故斜格子という文様の暗文なのか、興味深い問題である。

斜格子状の暗文を施す上総型の坏の存在が、当時の人々の生活、地域間の政治的・文化的交流の何を私た

ちに伝えてくれているのか、今後も追求していきたいと思う。

最後に、小稿をまとめるにあたり多くの方々にご教示・ご指導を賜わり心から感謝申し上げます。記して感謝の意を表します。

糸川道行・栗田則久・佐久間豊・鳥立桂・沼澤豊・野口行雄・橋本裕行・蜂屋孝之（敬称略、五十音順）

註

註1 佐久間1993、P102上段25行。

註2 註1に同じ。P92上段11行。

註3 宮本敬一 1981『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分尼寺跡の調査、P74第2図解説文。

註4 石田廣美・松村恵司・金子真士他 1977『山田水呑山田遺跡調査会』P808、20行～30行。

註5 註1に同じ。P116上段17～19行。

註6 地図上の番号は第1表「斜格子暗文坏出土遺跡一覧」に対応している。

本稿の最後に載せた斜格子暗文坏集成図のNoは第1表の資料Noと対応しているので、各遺跡から出土した斜格子暗文を確認いただきたい。

駅路（771～805年）は、『千葉県歴史通史編 古代2』を参考にした。

註7 糸川道行 2009 『稲荷台遺跡』、P602～605。

註8 第3図は、嶋越遺跡S I - 014号住居址の覆土中から出土した斜格子暗文坏と須恵器浄瓶である。浄瓶は頸部のみが遺存し、浄瓶特有の鐫状突起が認められる。内外面ともロクロ回転ナデ調整、焼成は良好で堅緻である。灰白色を呈し鐫状部などには灰釉が附着している。

註9 (財)千葉県教育振興財団2006 『研究紀要』25、P73。萩原恭一 1986 「千葉市大北遺跡の検討」『研究紀要』10、(財)千葉県文化財センター。

山路直充 2001 「第二章古代の交通路」『千葉県の歴史通史編 古代2』、千葉県。

註10 註9に同じ。P73。

註11 天野努 2001年 「掘り出された古代の村落」『千葉県の歴史通史編 古代2 第二編 第4章 第1節』。

註4に同じ。P912、14行。

註12 註4に同じ。P912、10行。

笹生衛 1993 「第5章古代の村」『房総考古学ライブラリー』7 P281。

註13 上総国については出土数の割合を地域ごとに分けて示した。

註14 第1表に示した。

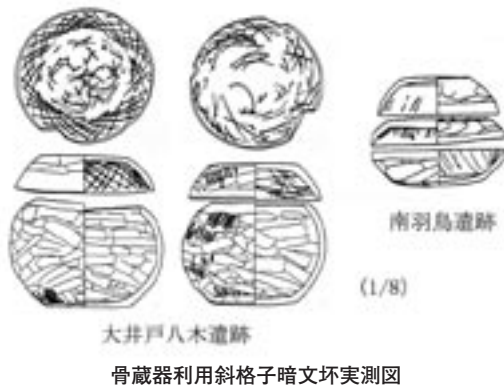
註15 (財)千葉県教育振興財団 2006 「Ⅲ下総地域の官衙関連遺物について」『研究紀要』25の中で集成された畿内産土師器を基に、上総国内において筆者が確認できた畿内産土師器出土遺跡を加えて作成した。

註16 萩原恭一他 1988 『東金市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター、P543~545。

註17 笹生氏は仏教関連の遺構や遺物の検出された遺跡をその組み合わせから6分類し類型化している。小屋ノ内遺跡は集落内に瓦塔・堂などを中心とした簡単な仏堂が営まれるとした第4類型に当たり、嶋越遺跡は前述のとおり、寺院的な遺構は検出されなかったものの、斜格子暗文環と共に堅穴住居跡から浄瓶が出土したことから、笹生氏の分類では第6類型に当てはまり、それに従うと僧侶の小規模な修行の場との性格付けができる。

第6類は、既存の集落から離れた小規模遺跡で、仏教関連の墨書土器や仏具類の出土は確認できるが、明確な仏堂建物は確認できず、神祇・道教信仰に関連する墨書土器も認められないことから、僧侶の小規模な修行場と位置付けられた。嶋越は台地の突端に位置する集落で、後世に削平されているため、遺構の遺存状態も悪く全体像を把握できない状況であるため、分類に際して断定はできないものの、そこには笹生氏が言う「拠点的な集落の規模の大きな村寺」からの布教にやってきた僧侶や、「集落内の小規模な村寺」の僧侶、仏堂を持たないまでも農民層の信仰に込めていた僧侶の姿が想像できる。また、嶋越遺跡は、千葉郡と山辺郡との郡境にも近くその立地は興味深い。

註18 大井戸八木遺跡(330. 331)と南羽鳥遺跡(223~226)の骨蔵器としての利用を実測図で示す。



註19 P61、1~8行。

註20 註19に同じ。P63、22~25行。

註21 宮城県仙台市所在の六反田遺跡は名取川流域に位置

し、東隣には7世紀後半に畿内産土師器を出土した郡遺跡がある(佐藤洋1987)。また、北東約3km程には陸奥国分僧寺・尼寺がある。本遺跡出土の斜格子暗文環は実測図からみて、器形や暗文が上総型環に近似する。しかし、内外面黒色処理であることや、外面にミガキが施されていることが相違点である。年代は8世紀初頭~前葉頃に位置づけられている(集成図379)(佐藤洋1987)。

また、栃木県の薬師寺南遺跡からも上総型に非常に似た斜格子暗文環が出土している(川原由典 1979)。薬師寺南遺跡は、下野国における仏教文化の中心地である。遺跡の北約600m程の至近距離に日本三大戒壇のひとつである下野薬師寺がある。西南方向7.5kmには下野国分僧寺・尼寺が位置する。六反田遺跡と同様の立地関係を看取できる。特に戒壇の存在する薬師寺近くからの斜格子暗文環の出土は興味深い(集成図380)(川原由典 1979)。

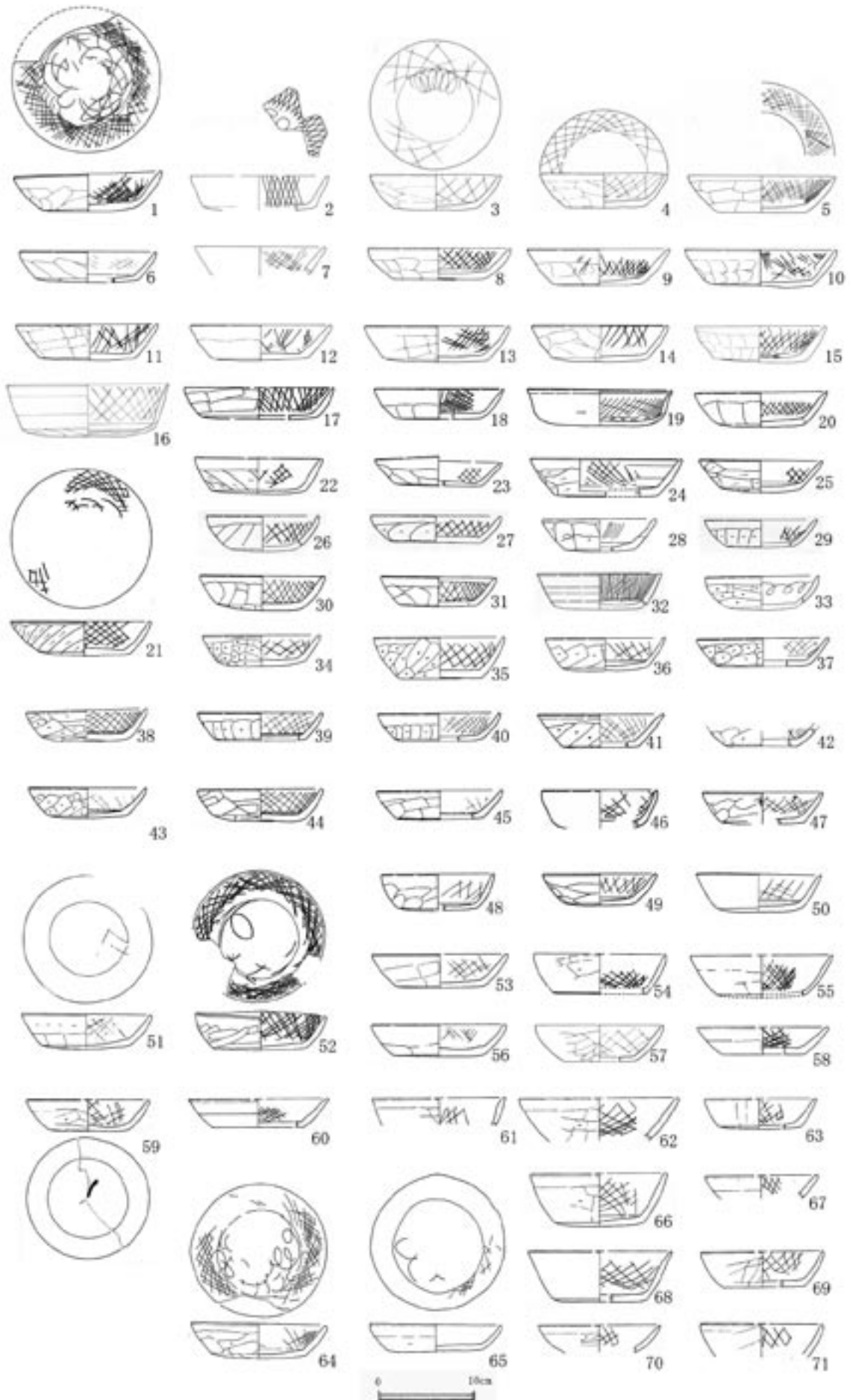
『日本霊異記』中巻第二十六に「禪師広達者、俗姓下野朝臣、上総国武射郡人。聖武天皇代、広達入於吉野金峯経行樹下而求仏道。」とある。上総国武射郡の僧、禪師広達が、天平感宝元年に金峰山に入り仏道を修めていた、というものである。時同じく8世紀半ばの僧侶の行動力や影響力が広範囲に及んでいたことを示す一文である。東北地方における斜格子暗文環出土にもこのような人々のダイナミックな動きが感じられる。

註22 石戸啓夫 1984 「大源太遺跡出土の畿内系土師器について」『大源太遺跡の発掘調査』青山学院大学大源太遺跡発掘調査団、(集成図381) P182

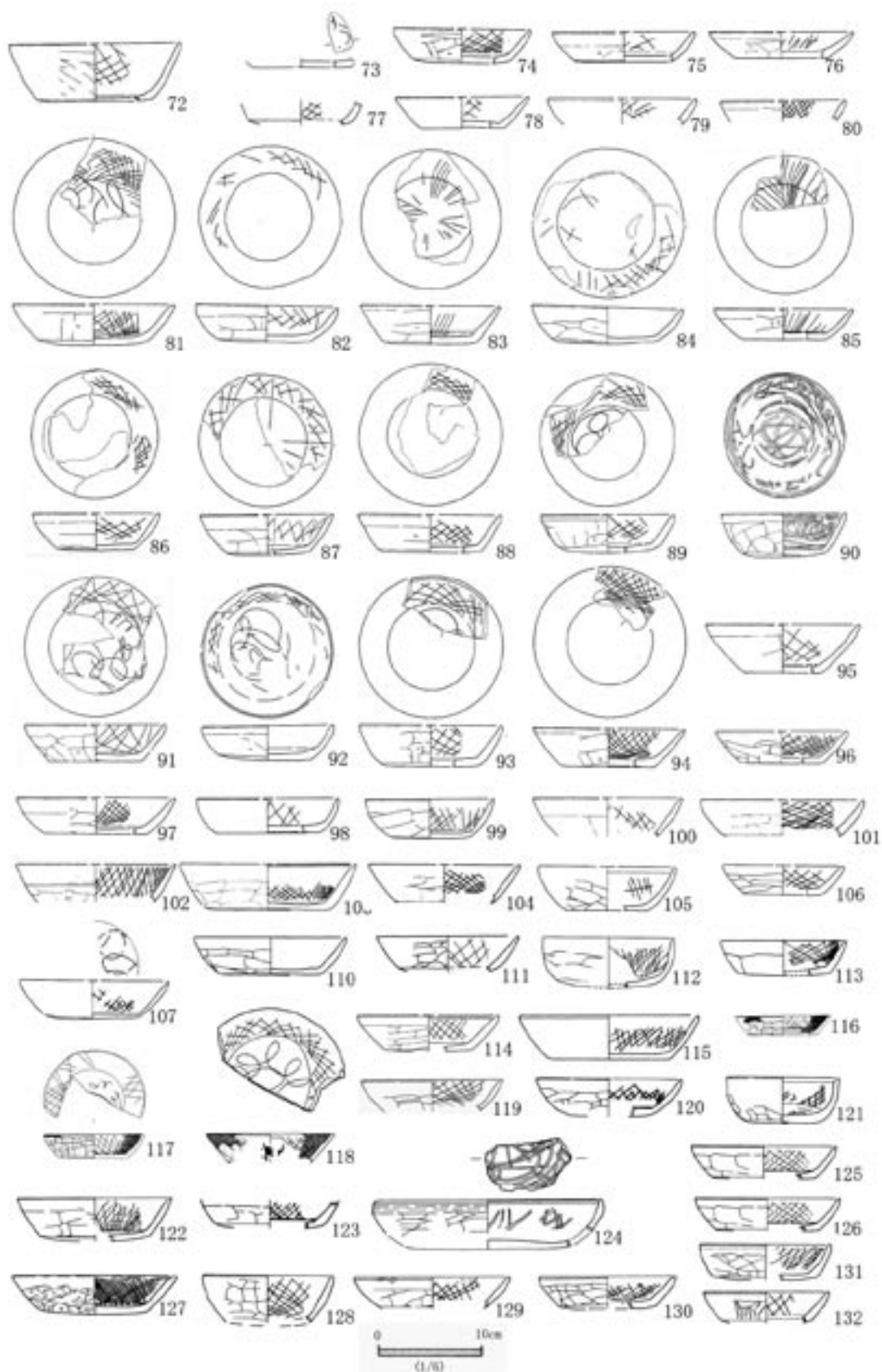
参考文献一覧

- 川原由典 1979 『薬師寺南遺跡』
鬼頭清明 1984 「古代国家と仏教思想」『講座日本歴史 古代2』、東京大学出版会
栗田則久 2007 「上総国・下総国における開発」『古代文化』第59巻第2号
小林義孝 2002 「火葬墓はどのように受容され、在地化したか-関東地方の石櫃をもつ火葬墓を例に-」『地域考古学の展開-村田文夫先生還暦記念論文集-』
佐久間豊 1993 「斜格子暗文を有する土師器環について」『史館』第15号
笹生 衛 1993 「第六章 古代の信仰 第三節 葬送」『考古学ライブラリー7 歴史時代(1)』、(財)千葉県文化財センター

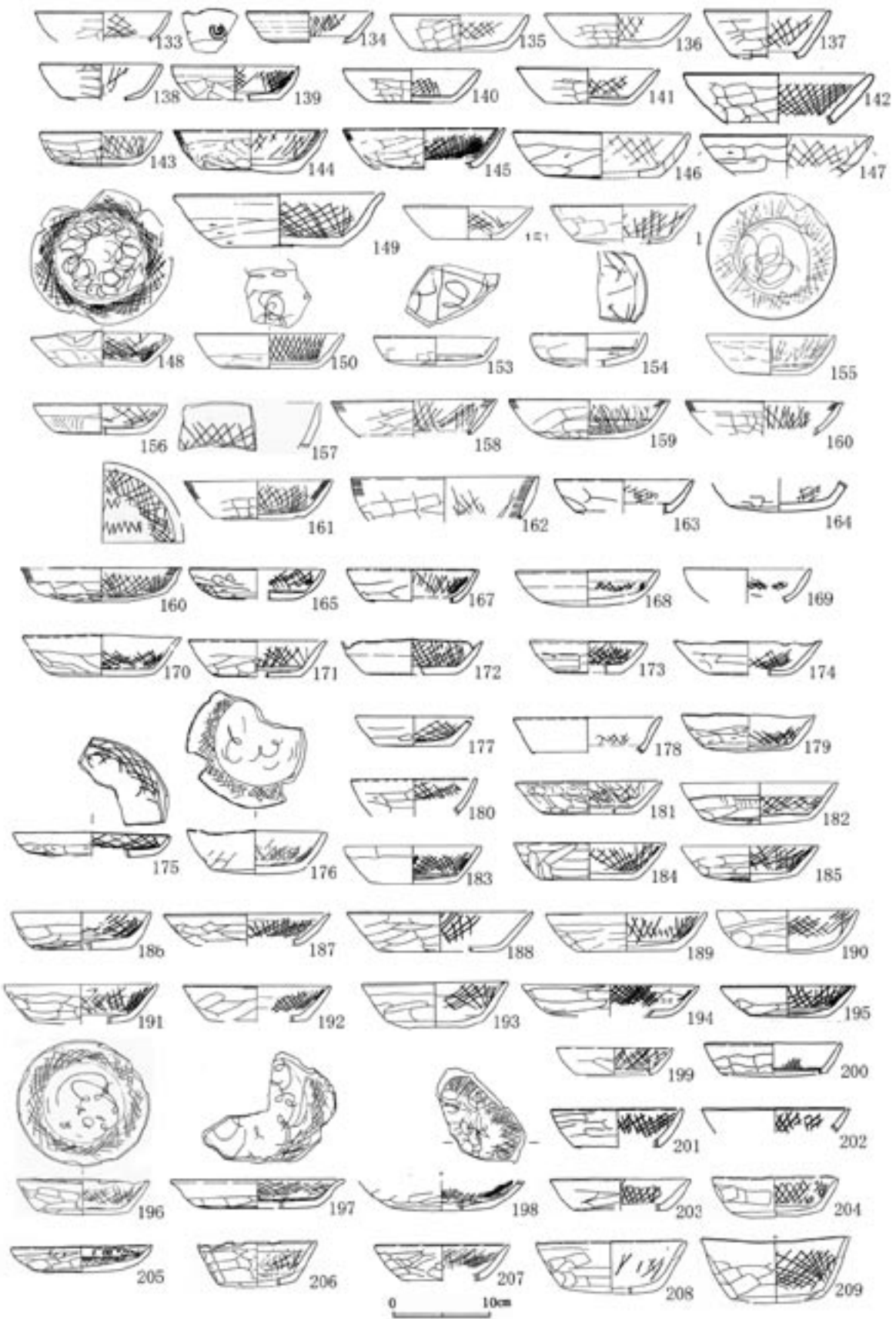
- 笹生 衛 1993 「『村落内寺院』における堂宇建物と仏教信仰」
『野中徹先生還暦記念論集』、野中徹先生還
暦記念祝賀会
- 笹生 衛 1994 「古代仏教信仰の一側面－房総における8・
9世紀の事例を中心に－」『古代文化』46巻
12号、(財)古代学協会
- 笹生 衛 1998 「古代集落と仏教信仰－千葉県内の事例を中
心に－」『仏のすまう空間－古代霞ヶ浦の仏
教信仰－』上高津貝塚ふるさと歴史の広場第
3回特別展図録
- 佐藤 洋 1987 『六反田遺跡Ⅲ』仙台市教育委員会
(財)千葉県教育振興財団 2005 『研究紀要』24
- 須田 勉 1985 「平安初期における村落内寺院の存在形態」
『古代探叢』Ⅱ
- 西 弘海 1980 「土器様式の成立とその背景」『考古学論考
小林行雄博士古稀記念論文集』、小林行雄
博士古稀記念論文集刊行委員会編
- 西山克己 1984・1985 「東国出土の暗文を有する土器(上)
(下)」『史館』17号・18号
- 長谷川厚 1993 「関東から東北へ－律令制成立前後の関東地
方と東北地方の関係について－」『二十一世
紀への考古学 櫻井清彦先生古稀記念論文集』
- 田中広明 1991 「東国の在産暗文土器」『埼玉考古』第28号
- 田中広明 2005 「古代東国の地域社会と土器の流通」『国士
館考古学』創刊号、国士館大学考古学会
- 鶴間正昭 2001 「関東における律令制立期の土器供膳具」『東
京考古』19
- 栃木県考古学会 1995 『東日本における奈良・平安時代の墓
制』、第5回東日本埋蔵文化財研究会
- 中田祝夫 1975 「日本靈異記」『日本古典文学全集』6、小
学館
- 直木孝次郎 1960 「靈異記に見える「堂」について」『續日本紀
研究』第11巻第12号、續日本紀研究会
- 林部 均 1986 「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」
『考古学雑誌』72巻第1号、日本考古学会
- 林部 均 1992 「律令国家と畿内崖土師器－飛鳥・奈良時代
の東日本と西日本－」『考古学雑誌』77巻4号、
日本考古学会
- 安井良三 1986 「日本における古代火葬墓の分類－歴史考古
学的研究序論－」『日本考古学論集6 墳墓
と経塚』、吉川弘文館
- 山口辰一 1985 「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古』
3、東京考古談話会
- 山中敏史 1984 「国衙・郡衙の構造と変遷」『講座日本歴史
古代』2、東京大学出版会
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』、塙書房



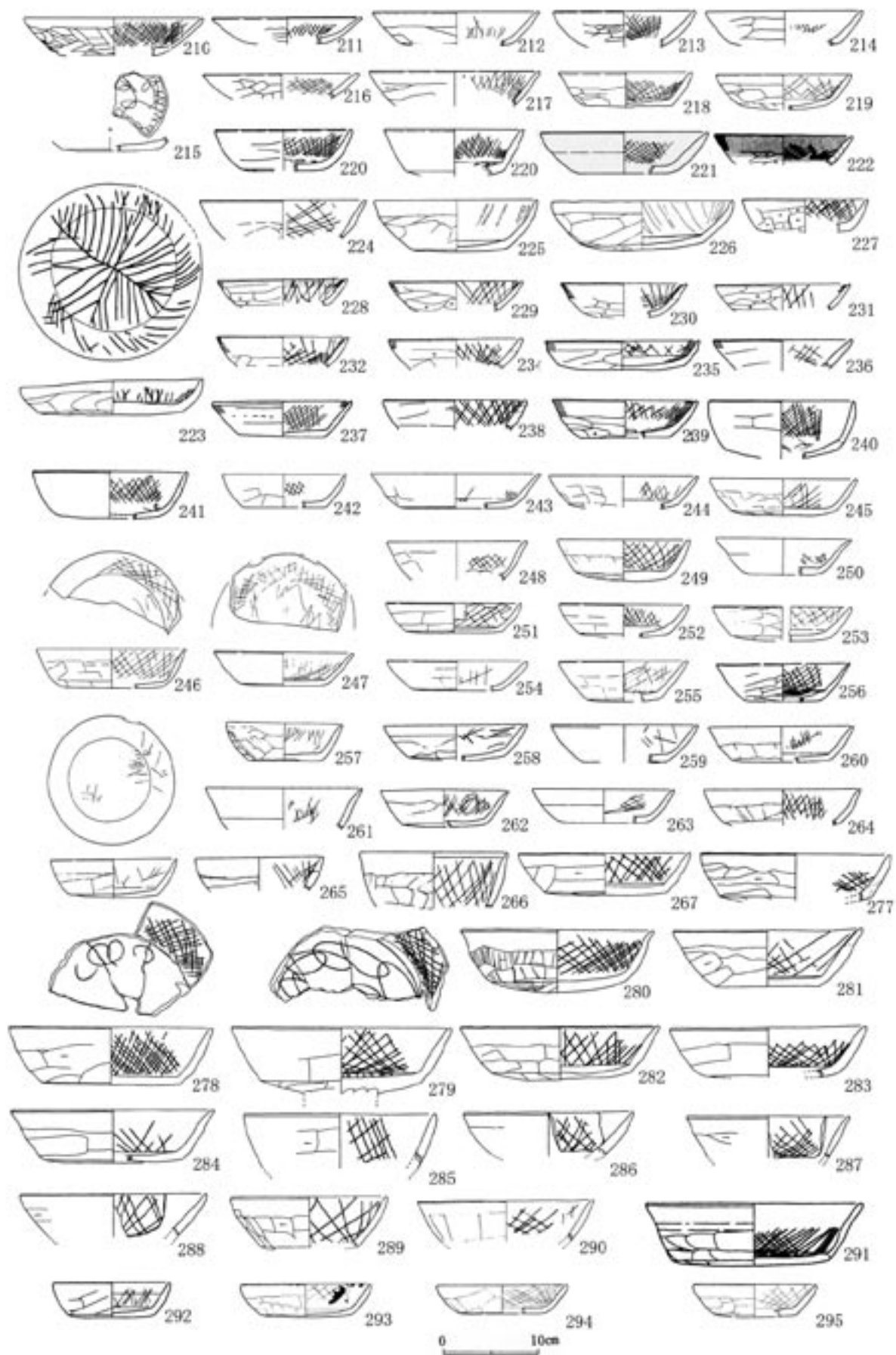
集成图 1



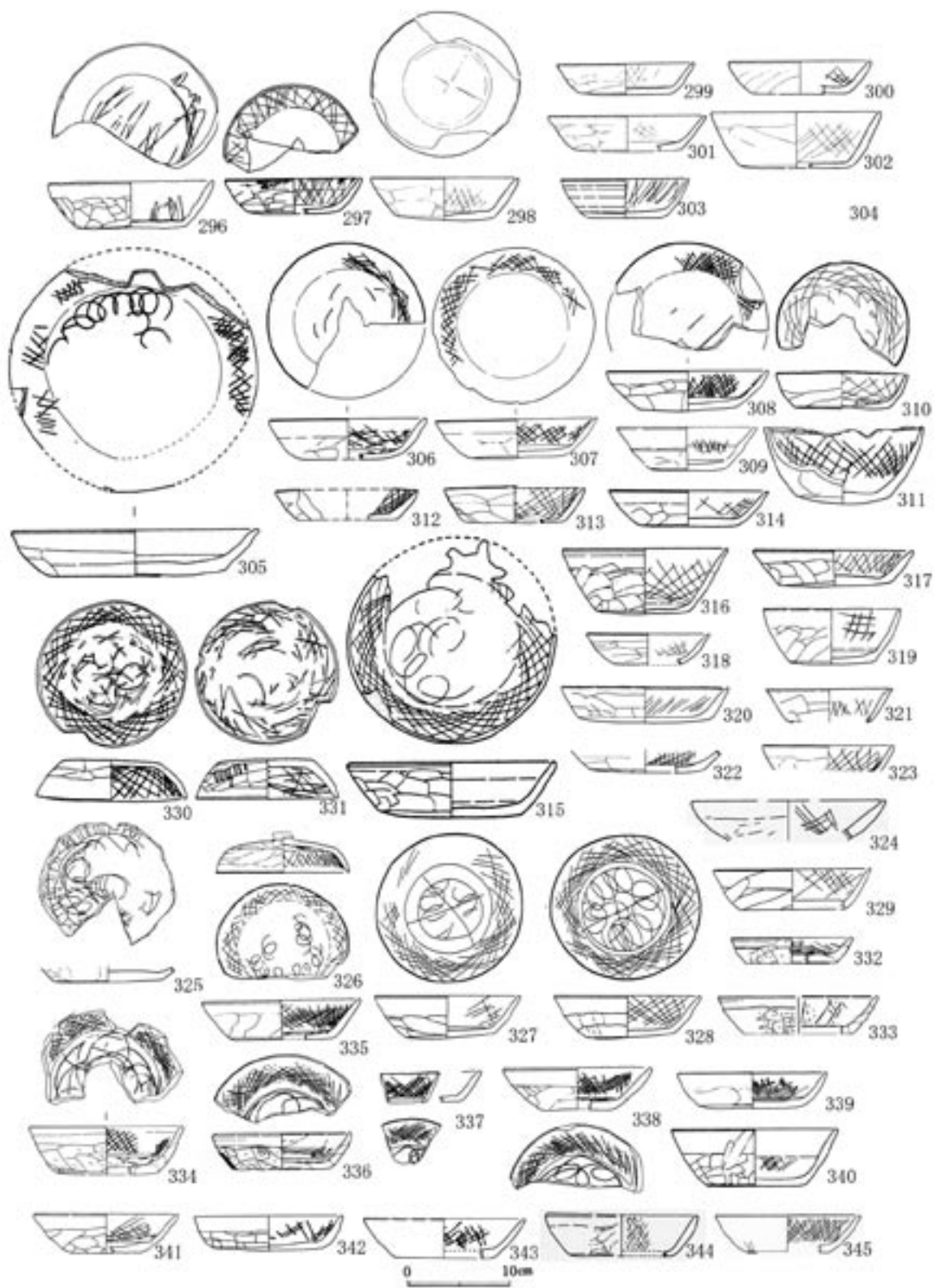
集成图 2



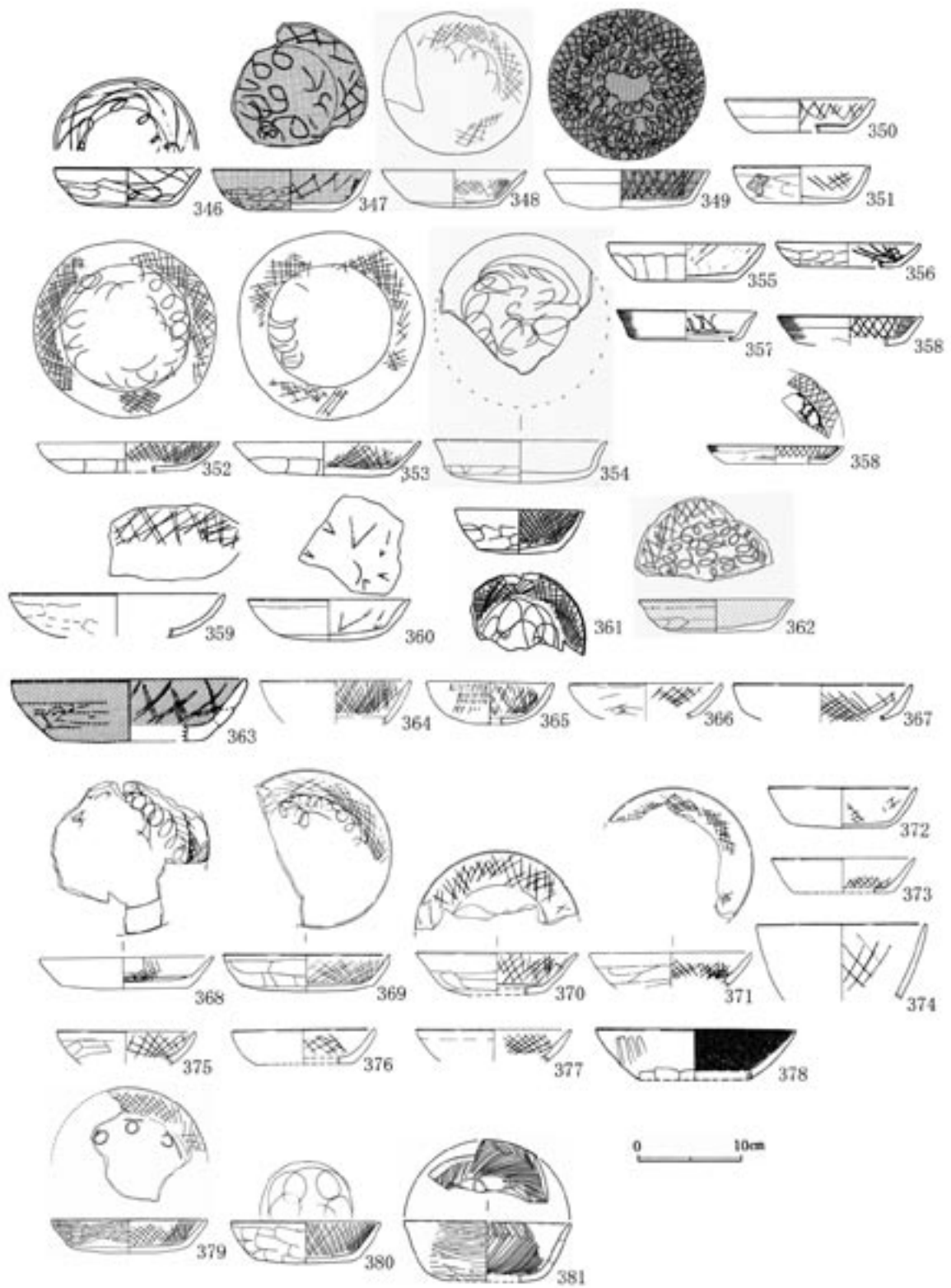
集成图 3



集成图 4



集成图 5



集成图 6